

# 北陸大学図書館報

Bulletin NO.40

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 読書感想文コンクール講評

山崎 博久  
(未来創造学部教授・読書感想文コンクール審査委員長)

⇒ 第15回 読書感想文コンクール 審査結果発表

⇒ 最優秀賞  
頼まれごとは試されごと

野市 成美  
(未来創造学部国際教養学科 1年次生)

⇒ 優秀賞  
『死ぬ瞬間』を読んで

辻 初花  
(薬学部薬学科 1年次生)

⇒ 優秀賞  
『キッチン』を読んで

原 保乃花  
(薬学部薬学科 1年次生)

⇒ 優秀賞  
『道をひらく』を読んで

高橋 昌平  
(未来創造学部国際マネジメント学科 1年次生)

⇒ 審査委員から一言

⇒ 寄贈図書

⇒ 目次

# 北陸大学図書館報



## 読書感想文コンクール講評

未来創造学部教授

読書感想文コンクール審査委員長 山崎 博久



今回も多くの感想文が寄せられ、数は前回より多かった。薬学部 106 編、未来創造学部 233 編、合計 339 編で、昨年度より 28 編増である。そのうち最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名、佳作 5 名、努力賞 10 名で、合わせて 19 名の入賞者が出た。毎度のことだが、受賞作はいずれも力作ぞろいであり、審査員の総評点に大きな差はない。

最も多く読まれた作家は東野圭吾氏で、『容疑者 X の献身』の感想文 4 編をはじめ他に 7 作品が読まれ、合計 13 人が氏の作品をとりあげている。前回 1 位だった百田尚樹氏は今回は 5 位と順位を下げたが、『永遠の 0』の感想文は前回の 7 編から今回の 5 編とあまり変わらず、この作品への根強い人気がかがえる。昨年の芥川賞受賞で話題を呼んだ又吉直樹氏の『火花』の感想文がよせられたのは予想通りで、7 人に読まれた。また、日本文学史に残る作家で、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、太宰治らは常連で、今回もそれぞれ 6 位 (漱石) 7 位 (太宰) 8 位 (芥川、鷗外) につけている。

前回の講評で西洋文学の古典などを薦めたが、今回読まれた作品に『ヴェニス商人』、『ロビンソン漂流記』、『変身』、『戦争と平和』などがあつた。古典を薦める理由は、それが時代や民族を超え、多くの人の心を動かしてきた宝だからである。人気沸騰後しばらくたつと忘れ去られる書物とは違い、古典は永遠の生命を持っている。

実は、今年はシェークスピアとセルバンテスの没後 400 年に当たる。また、哲学者ライプニッツの没後 300 年でもある。そこで、これを機会に (ライプニッツは難解かもしれないが) シェークスピアの作品やセルバンテスの傑作『ドン・キホーテ』に親しんでみてはどうだろうか。

人口に膾炙<sup>かいしや</sup>したシェークスピアのセリフは今なお新聞・雑誌・書物で引用され続けている。To be or not to be, that is the question. (ハムレット) や、Out, out, brief candle! Life's but a walking shadow. 「消えろ、消えろ、つかの間の灯! 人生は歩く影にすぎない」(マクベス) などは有名で、ご存知の人も多いだろう。

セルバンテスの『ドン・キホーテ』は世界文学における小説の原点ともいわれ、十数年前に行われた世界 50 か国以上の著名作家 100 人の投票による「史上最高の文学 100 選」で 1 位に選ばれた。物理学者アインシュタインはドストエフスキーと並んでセルバンテスを高く評価し、生涯この小説を愛読し、ことに晩年、くりかえし読んだという。R. シュトラウスは交響詩『ドン・キホーテ』を作曲し、騎士の遍歴を音楽で描いた。

ぜひ、一読を。

## 第15回 読書感想文コンクール

# 審査結果発表

応募作品339編の中から、次の作品が選ばれました。

### 入賞作品

#### 最優秀賞

野市 成美 頼まれごととは試されごと (未) 1年

#### 優秀賞

辻 初花 『死ぬ瞬間』を読んで (薬) 1年

原 保乃花 『キッチン』を読んで (薬) 1年

高橋 昌平 『道をひらく』を読んで (未) 1年

#### 佳作

野村 未帆 人を無害化する魔法 (未) 3年

下田 歩実 『ぼくのメジャースプーン』を読んで (未) 3年

木戸 紅映 走る強さ (未) 2年

虎本 珠美 トットちゃんから学んだこと (未) 2年

水上 碧 『嫌われる勇気』を読んだ読書感想文 (未) 1年

#### 努力賞

今村 咲耶 約束。 (薬) 1年

大橋 彩乃 命の価値の上下 (薬) 1年

小野 静羽 『使命と魂のリミット』を読んで (薬) 1年

酒井 美咲 おいでませ、魅惑の移動式船上遊園地へ (薬) 1年

高島 舞 『図書館戦争』を読んで (薬) 1年

西野 美空 『火花』を読んで (薬) 1年

藤田 紫音 失敗から学ぶ新しい人生 (薬) 1年

前田美紗稀 『粘つく水』を嚙下して (薬) 1年

鈴木美乃莉 黄色の物体 (未) 1年

野上 真司 心に余裕を (未) 1年

#### ベストタイトル賞

酒井 美咲 おいでませ、魅惑の移動式船上遊園地へ(『TRIP』を読んだ感想文) (薬) 1年

\* (薬) は薬学部、(未) は未来創造学部です。

## 頼まれごととは試されごと

未来創造学部国際教養学科 1年次生 野市 成美



書名 お金でなく、人のご縁ででっかく生きる！  
著者 中村 文昭  
出版社 サンマーク出版

「頼まれごととは試されごと」。これは、私の祖父の口癖である。祖父は、自営業を営んでいるのだが、ちょっと特殊なことをしている。毎月自主製作の情報誌を発行しているのだ。かれこれもう発行して14年経つのだが、その読者は約500人ほど、全国各地に散らばっている。そういうこともあり色々な縁があって、祖父は講演を頼まれる機会がちらほらあるのだが、元々恥ずかしがり屋な性格なので、最初は断ってばかりだった。しかし、本書を読んでからというもの、依頼されるごとに「はい、喜んで！」と即答するようになったのである。そこまで祖父を突き動かしたものは何なのだろう、と気になったのが、本書を手にとったきっかけである。

著者である中村文昭さんは、上京しフラフラしていた時に野菜の行商をしていた田端社長と出会い、生き方を変えられていく。田端社長は「やる前からできないと言うな」「返事は0.2秒でしろ」「99日をもって半ばとせよ」など、様々な胸に響く言葉を残している。ここでは、「頼まれごととは試されごと」と「『でもでも星人』になるな」という言葉を取り上げていこうと思う。

夏の暑い日、働きっぱなしの時に上司に「お客さんの分の飲み物を買ってきてくれ」と言われたら、あなたはどうするだろうか。そのお客さんの為に、一分一秒でも早く自動販売機まで走って行くだろうか、それとも暑さにだらけてゆっくり歩いて行くだろうか。つまり、「頼まれごととは試されごと」とは、こういうことなのである。頼んだ側の人間はこの人に任せ、任せたこと以上のことを期待しているから頼んでいる。つまり、頼まれている側は頼んだ側に試されているのだ。ゆっくり帰ってきて渡された飲み物よりも、汗だくで息を切らして帰ってきて渡された飲み物の方が、「この人は自分の為にこんなに頑張ってくれたんだ」という付加価値がつく。これが後々のひとつのご縁に繋がっていくのだ。

私は最初、人に「○○をして」と頼まれた時、心の中で「なんで私が」という考えが真っ先に思い浮かんでしまうような考え方しかできなかった。それは人の役に立ちたい、よりも面倒臭い、が勝ってしまったからである。しかし、本書を読んでその考え方が一気に覆された。一番自分の中で変わったのは、アルバイトである。「頼まれごととは試されごと」を頭に留めて行動すると、お客様の要望1つ1つに重みが増すのだ。この人は自分にスピードや誠意など、様々なことを期待してくれて頼ってくれている。そういうことを考えながら働くことで、お礼を言われた時の嬉しさが何倍にも増すのである。

次に『でもでも星人』だ。「でも」「だって」「あとで」…日常的に使ってしまう言葉ではないだろうか。「○○がほしいんだよね…でもお金がなくて」「だって時間がないから」「あとでやるよ」。どれも、目標を達成できない自分を正当化する言い訳をしていることになる。やる前からできないと否定することも、ここに当てはまるのではないだろうか。できないことに言い訳をすることは誰にでもできるし、自分も今までやってきたことだ。言い訳を並べる前に、分からなかったことは分かる人に聞くなど、当たり前のことを見直していかなくてはならないな、と感じた。

これから先、社会に出てどんな職種に就くかはまだ分からない。しかし、共通して言えるのは、「人の喜ぶことを最優先する」ということである。それが、人生を長い目で見た時に、自分にそのまま返ってくると私は考えている。数年後、自分が働いている時に「頼まれごととは試されごと」「言い訳で自分を正当化しない」ができてるように、大学生活の中でその習慣を身に着けていきたい。とりあえず、今日はスーパーまでおつかいに行ってみようか。どういう風に行動すれば、相手が喜ぶか、最良を考えながら。

## 『死ぬ瞬間』を読んで

薬学部薬学科 1年次生 辻 初花



書名 死ぬ瞬間—死とその過程について  
著者 エリザベス・キュープラー・ロス  
出版社 中央公論新社

この本を読もうと思ったきっかけは推薦図書のリストに載っていて、その書籍情報に「医療系大学の学生には是非読んでほしい」と書かれていたことです。薬学部に入學したということで、このような医療に関する本も読んでみようかな、という単純な考えからこの本を読んでみることにしました。

読んでみると、想像よりもはるかに重苦しい内容でした。著者と末期患者とのインタビューを通して、死にいたるまでの末期患者の心の動きを研究する、といったようなものでした。人は自分の死を受け入れるまでに、「第一段階／否認と孤立、第二段階／怒り、第三段階／取引、第四段階／抑鬱、第五段階／受容」の五つの段階を経るそうです。患者たちはどのように段階を経て死を受け入れるようになっていくか、そしてその時患者たちは何を思っているのかが書かれていました。

この本を読み面白いな、と思ったのは「私たちは無意識のなかでは自分の死を予測することができず、ひたすら不死身を信じていて、死者が出たとニュースなどで聞いた時には「死んだのは『隣のやつで、おれじゃなかった』と、無意識に心の片隅でそっと喜ぶことになる」というところでした。自分は不死身だと信じている、たしかにその通りなのかもしれません。今考えてみると、私は自分が死ぬ可能性というものを全く考えていなかったということに気がきました。さらに自分が“死ぬ”という状況を想像することすらできないことにも気がきました。まだ起きていないことだから想像できないというのも仕方ないかもしれませんが、“死”を経験できるのも人生1度限り。経験のしようがありません。しかしこの本を読み、自分の“死”について考えてみたいと思いました。死はいつ、どこにやってくるかわかりません。そして私にもいつか「死ぬ瞬間」が来るのでしょうか。その瞬間が来るまで、私は後悔のないような日々を過ごしていきたいです。そして、私は満ち足りた人生を送った、と思えるようになりたい。最期が後悔、恐怖などの負の感情で満たされたままというのは嫌だと感じました。この本に出てくる末期患者が、たとえ最初に自分が不治の病であることを知った時、「いや、わたしのことじゃない。そんなことがあるはずがない」などと否定していても、最終的には自身の“死”を受け入れ安らかな眠りに就く姿には感銘を受けました。また、自分の“死”というものを受け入れるまでには人それぞれ異なっていて、自分の力だけで“死”を受け入れることができた人、家族などの助けがあってそれができるようになった人、そして著者からのインタビューがきっかけとなった人がいて、その状態になるまでにどのような思いを抱いていたのかが本当に十人十色で興味深かったです。どのような経過を辿るにせよ、最期には自分の“死”を受け入れることができた人に尊敬の念を抱きました。私もこのような状況に陥った場合、はたして自分の“死”を受け入れることができるのでしょうか。今はまだ、わかりません。

この本は“死”について深く考えさせる本でした。私は医療系大学に入學したということで、将来“死”と関わり合う可能性は高くなると思います。死に瀕している患者などと関わることもあるかもしれません。そのようなときには自分の“死”だけではなく、他人の“死”を考えなければならないときもあると思います。その時は、この本の存在を思い出したいです。それはこの本には死に瀕する患者にどう接すればいいかなども書かれていたからです。そして、自分ができる最善のことをしたいです。今はまだ“死”と関わることはないかと思いますが、これからも“死”について考えていきたいです。

## 『キッチン』を読んで

薬学部薬学科 1年次生 原 保乃花



書名 キッチン  
著者 吉本 ばなな  
出版社 角川書店

孤独と向き合うことは、とても辛く、淋しいことだ。この本の主人公みかげは、大学生という立場でありながら、残された唯一の家族であった祖母を亡くし天涯孤独となってしまう。いつか祖母も、という不安を常に抱えながらもそれを隠し、普通の大学生を演じていたみかげが、嫌でも孤独と向き合わざるを得ない状況になってしまったのである。

この本を読んで私が気付いたのは、生き方で見ると人は3通りに分けられるということである。温かな家族に守られ、孤独を感じないように生かされる人、不安や孤独を感じることはあっても、それを直視しないように生きる人、そして、孤独を認め、受け入れた上で生きている人だ。

孤独と向き合うとはつまり、死と向き合うということである。死はあまりにも重すぎる。「幸福とは、自分が実はひとりだということ、なるべく感じなくていい人生だ。」まさにその通りだと思った。「幸せの域を出ないように教育され」るのも、「淋しいけどふわふわして楽なところにい」るのも、重圧から逃れられるという点で、幸福であろう。

現代は、孤独を避けて生活するのに適した環境であると思う。数多くの娯楽があるし、人とのつながりも求めれば簡単に手に入ってしまう。刺激的な日々にくるくると心動かされている間は、きっと満たされていると感じるのであろう。しかし、果たしてそれは本当の幸福と言えるのだろうか。

「人生は本当にいっぺん絶望しないと、そこで本当に捨てらんないのは自分のどこなのかわかんないと、本当に楽しいことがなにかわかんないうちに大きくなっちゃうと思うの。あたしは、よかったわ。」これは愛する妻を亡くし、身寄りのない中で、女として生まれ変わって息子を育ててきたえり子の言葉である。孤独な状況に置かれ絶望したことを「よかった」と言い切る彼女は、そう自分に言い聞かせることで、幸せだと思いつまみ込もうとしているだけだと感じるだろうか。

祖母を失ってからみかげは、えり子の息子で、祖母の知り合いであった雄一に呼ばれ、半年の間3人で一緒に暮らすことになる。大学生である雄一の家族は、えり子だけだった。温かでどこか淋しい居候生活を経てみかげの気持ちの整理が付き始めた頃、「体を張って明るく生きてきた」えり子はその魅力ゆえに「暗い泥の中で生きている人」に殺されてしまう。しかしえり子は遺書の中で、「私、私の人生を愛している。」と言っているのである。

みかげと雄一は同じ孤独を感じている者同士であったが、互いに相手を求めることはなかった。2人は共に悩み、苦しみながらも、1人で孤独と向き合っていた。「日常的な意味では二人は男と女ではなかったが、太古の昔からの意味合いでは、本物の男女だった。」これこそ、人の本来あるべき姿なのかもしれない、私は思った。

幸福の中にいる人たちを見て、「自分が自分であることがもの悲しく」なっていたみかげが、幸福の中にはいるはずの人の「毎日の気持ちを想像」して「心からもの哀しく」なるまでには、何があったのか。「自分がいつか死ぬということを感じ続けていたい。でないと生きている気がしない。」と思いつまみ込もうようになるまでには、何があったのか。私は、絶望に立ち向かい、命がけで生を全うしようとする生き方にこそ、本当の幸福が訪れるのだと思っている。

お腹がすいた時、お手軽なインスタント食品でも食事を済ませてしまうことはできる。インスタントでも十分美味しいし、満たされる。だが、そればかりに頼るときっと体に悪いものが溜まっていってしまうと思う。私は、空腹に耐えながらも「キッチン」に立って、じっくり時間をかけて作った手料理を食べたいと思うし、食べさせてあげたいと思う。そしてそれはきっと格別に美味しいものだと思うのだ。

## 『道をひらく』を読んで

未来創造学部国際マネジメント学科 1年次生 高橋 昌平



書名 道をひらく  
著者 松下 幸之助  
出版社 PHP研究所

この本は、私の考え方に大きく影響を与えた。私がこの本を手にとったのは、高校三年生のときである。とある駅の小さな売店でたまたま目についたのがきっかけだった。その場で少し目を通し、真っ先にレジに向かった。

この本は、松下幸之助さんの考え方がいくつかの項に分かれ紹介されている。いろいろな局面や状況での物事の捉え方、考え方一つ一つが私の心に響いた。その当時、高校三年生だった私は進路や部活のことで色々と考えることが多かった。そんな時に大きく影響を与えた言葉がある。「それがたとえ遠い道のように思えても、休まず歩む姿からは必ず新たな道がひらけてくる。深い喜びも生まれてくる。」という言葉である。私は、夢や目標といったゴール地点の事ばかり考えていて、結果にこだわるあまり、過程をしっかりと見つめることが出来ていなかったと、この言葉で気づかされた。遠い道にたどり着くのを焦るばかりで、一步一步のわずかな成長を感じることが出来ていなかったのである。一步一步のわずかな成長に喜びを感じ、でも決してそれに甘んじることなく、日々鍛錬していくことが大切だと実感することが出来た。それからの私は大きな目標を達成するために、日々の積み重ねをより一層大切にしている。これは「幸せに生きる」という面でも大切な事だと感じた。小さな幸せに気づき感謝することが大事であり、大きな幸せを求めるあまり、それに執着しすぎて小さな幸せに気づけず損をするということだ。改めてそうやって考えてみると分かっているようで自分は全然分かっていなかった。小さな幸せに気づいているようで気づけていなかったのである。それは、「あたりまえ」だと思っているからだ。例えば、朝昼晩しっかりと三食食べられること、夜になったら布団で寝ること、家族がいること、飲み物を飲むこと、歩けること、話せること、これらは全て小さな幸せである。しかし本当に幸せを感じることが出来ているか。私は心のどこかで「あたりまえ」だと思っていた。小さな幸せに気づき感謝して生きることは、出来ているようで全く出来ていない。自分がどれだけ幸せなのか。どれだけ恵まれているのか。身の回りには本当に多くの幸せがある。大事なのはそれに心から気づき、感じ、感謝することである。あたりまえだと思っている小さな幸せとは、とてつもなく大きな幸せなんだと気づくことが出来た。そしてまた自分たちが感じている悩みはとてつもなくちっぽけだということも感じる事が出来た。「あたりまえ」と思われていることの中にある、全ての本当の幸せに気づくことが出来たら、自分が抱えている悩みなどほんとうにちっぽけなものである。この幸せに日々感謝して生活することはなかなか出来ない。大きな目標を達成するためにも、そういった小さなことの積み重ねを大切に、日々生活していく。

この本の著者である松下幸之助の考え方や物事の捉え方には、学ぶべきことが多く、自分はまだまだだと感じさせられる。自分にはない考え方を新しい知識として手に入れることが出来る。何か壁にぶち当たったとき、悩みを抱えた時などに、本から学んだ言葉がそれを乗り越えるためのヒントとなる。その場その場の状況で答えは変わってくる。また答えはひとつではない。あくまでもこういった言葉というものは一つの捉え方、考え方に過ぎない。しかしこういった言葉を知識として覚えておくと、どこかでその言葉が活きたときがある。その学んだことを活かすか活かさないかは自分次第である。最終的に自分の道をひらくのは自分以外の何者でもない。自分自身でしか道はひらけないのである。私はこの本から得た知識を大切にして、一步一步着実に進んでいく。自らの道をひらくために。



第15回 読書感想文コンクール入賞者の皆さん

## 審査委員から一言



審査委員  
山崎 眞津美  
(薬学部准教授)

受賞されたみなさん、おめでとうございます。今回、審査させて頂いて、みなさんが様々なものに興味を持ち、様々なことを考え、また、それぞれにこれからの自分に思いを巡らせているところに、可能性やパワーを感じました。

読書というと、子どもの頃、読んだ本を記していくためのノート之母から渡されたことを思い出します。最初は、読み終わるたびにノートが埋まっていくのが楽しみだったのですが、次第に読書そのものが心地よく感じられるようになりました。それは、読み通した達成感だけではなく、読書で得られた知識や読書で培われた集中力であったり、疑似体験であったりと、見える・見えない形の収穫があったからだと思います。

現在は、専ら眠りにつくための読書しかしていませんが、若いみなさんには「感想文」を書くことにとらわれず、読書を通してさまざまな発見をし、将来へつなげていってほしいと思います。



審査委員  
安田 優  
(未来創造学部准教授)

今回の読書感想文コンクールで上位に残った作品には、甲乙つけかねる出来映えのものも多く、順位化することが難しいものもありました。各々の書き手が本を読んで、感じたことや考えたことをまとめ、読み手にしっかりと伝えることができていると思います。審査員として、皆さんの感想文を楽しく読ませていただきました。

能動的な読書を通して、私たちは他者の考えを知り、視野を広げたり、共感力や理解力を高めたりすることができます。また、読書経験をきっかけとして、新たな考えが浮かぶこともあるかもしれません。読書は私たちの人生を豊かに実りあるものにしてくれるのです。このコンクールのために久々に本を読み、改めて読書の面白さを感じた人もいるでしょう。その感触が薄れないうちに、図書館を活用して多くの本に接し、大学生活を更に有意義なものにしてください。



審査委員  
鈴木 宏一  
(薬学部講師)

私事で申し訳ない。私は、子供の頃から部活動に明け暮れていたため、本に触れることを忘れていた。いや知らなかった。高校時代、片道1時間の電車通学に本を読んでみよう、何も知らずとりあえず角川文庫からと思い手に取ったのが『時をかける少女』で、後に映画化（原田知世主演、古いか？）された作品であった。内容はともかく、この作品には「薬学」の文字がでてくる。「“薬学”？」から今の私につながった作品だったのかもしれない。また、この作品の映画も観てみたが、本で自分が思い描いていたものと何かが違っていたことを覚えている。今回の読書感想文コンクールでたくさんの感想文を読ませていただいた。そこで感じたことは、読む人によって感じ方がそれぞれ違うことで、同じ本でも感想文が違う。あって当然である。また、今回のベストタイトル賞では、よくここまで発展できたなという思いである。今頃になって、本には映画にはない素晴らしさや凄さがあることに気付いた。学生にはたくさんの本に触れてほしいと思う。



審査委員  
川端 健司  
(未来創造学部助教)

今回応募された作品には「生」や「死」をテーマとしているものが多数見受けられました。高校時代までは生きることに対して、あたり前とっていた人も、大学生となり、深い学びを通して人生と真剣に向き合うようになった証拠ではないかと思います。実際に、本1冊によって救われた人、人生観が大きく変わった人もいたのではないのでしょうか。

大学は単に単位を修得する場所ではありません。様々な人や本との出会いによって、人間性を磨く場でもあります。今、なんとなく大学に通っている学生や、生きていることがあたり前と感じている学生は、目の前にある本を1冊手に取ってみてください。必ずや、自分の人生と真剣に向き合うきっかけを与えてくれることでしょう。

## 寄贈図書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書名	寄贈者
『夜また夜の深い夜』他 計46冊	泉 洋成 (理事)
『骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン 2015年度版』他 計19冊	三浦 雅一 (薬学部長)
『清代金門鎮総兵署総兵官考略』 2冊	王 涵 (未来創造学部教授)
『唐寅』	村田 和弘 (未来創造学部教授)
『平成28年度版 戸籍実務六法』	胡 光輝 (未来創造学部准教授)



北陸大学図書館報 NO.40 平成28年3月31日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850  
Eメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/about/campus/library.html

※北陸大学図書館報は、ホームページでもご覧いただけます。